ともかき

発行所
東京都立三田高等学校
青葉会
（同窓会）
港区三田1丁目4番46号
電話（453）1991㈹

あと2年で（ぶたとせ）60才を迎える母校

創立五十周年を主催して

東京都中央就学相談所　久保道雄

来るべき昭和六十四年には本校定時制課程の創立六十周年を迎えます。あと二年です。

ついこの間、創立五十周年の祝賀行事を行ったばかりと思っていましたのに、本当に月日の経つのは早いものです。

あの時は同窓会の皆さんにも大変お世話になりました。お陰で、すばらしい祝賀行事ができました。

創立五十周年が間近いことは着任早々から聞かされておりました。

そこで、当時の学校長長谷部正治先生からいろいろとご指示頂きながら、少しずつ準備を進めていきました。

前年にあたる昭和五十三年度には**準備委員会を発足**させました。私共教職員の外にPTA、同窓会の各役員の皆さん方にも参加して頂きました。

当時の同窓会は会長の富川さんを中心に大変若々しい元気一杯の役員さん達でした。

さて、**準備委員会**では先ず創立五十周年を祝う趣旨を検討し、次のように規定しました。

一、定時制課程としては珍らしい五十周年を祝賀するのにふさわしい記念行事とする。

二、記念行事を契機として、この輝かしい伝統を維持し、発展させて、さらに新たな校風づくりをめざす。

三、形式的な記念行事に流されないよう教職員・生徒・PTA・同窓会が一体となって意義深いものとする。

この趣旨に沿って**準備を進めることとして**、実施期日を昭和五十四年十月二十八日に設定し、**行事は式典と祝賀会を行うと共に、記念誌の発行記念品、卒業生名簿の作成**などを予定することにしました。

その後、創立四十周年の記念行事記録や他校の周年行事を参考にしながら準備委員会で煮つめていきました。

予算も概算の案が作成されPTAでは二年間に亘って、記念行事のための積立てをして頂きました。

五十四年度に入り、**準備委員会を実行委員会に切り替えて**、四月に着任された学校長杉村親一先生のご指導を頂きながら、**教職員、生徒、PTA、同窓会の全組織を挙げて**十月二十八日に向けて、記念行事の準備に邁進しました。

十月十七日に第四回実行委員会を行いましたが、それぞれの係から準備状況の報告があり、これなら大丈夫とホッとしたことでした。

当日は何か夢中で過ぎてしまいましたが、**式典も大変厳粛で、祝賀会も非常に盛会であったこと**を記憶しています。

その後の反省会などでも、はじめの趣旨が十分に生かされた周年行事であったと評価されたことを付記しておきます。当時協力して頂いたすべての方々に心から重ねて感謝したいと思います。

さて、いよいよ二年後には本校定時制も満六十歳の還暦を迎えるわけで、まことにご同慶の至りです。創立六十周年が本校の歴史と伝統にふさわしい形で祝賀されることを心より願っています。（元教頭）

栄光の中で

名誉会長
学校長　藤川侃二

青葉会員の皆様、皆々ご健勝でお過しのこと心からお喜び申し上げます。

さて、全国的な定時制高校の生徒数の推移を見ますと、社会の状況をよく反映しており、その点では、本校も例外ではありません。最近の都内の定時制高校への就学者の傾向は、全日制への入学がかなわず、定時制へ籍を置いている者が多いといわれています。しかし、本校の場合、個々の生徒に当たってみますと、全日制の定員からあぶれたと判断するのは早計で、それぞれに事情があり、中には、全日制進学校の生徒に遜色のない者も在学しています。

昭和四十年代の前半頃までは、中学卒業後、就職を第一義としながら、傍ら高校教育を受けようとする者が主流であったと、現在との違いを指摘する向きもありますが、底流においてはあまり変らないように思われます。といいますのは、視点を変えて、入学時から卒業時に移してみますと、卒業生の大方が勤労青年であることから、はっきり致します。

このことに、安易な気持で定時制高校に入学しても、学校生活に、真剣に取組まなければ、卒業まで辿り着けないということを示していると思います。すなわち、定時制高校の卒業生は、知・情・意の備わった立派な人格者揃いであるということが出来ると思います。本年も、卒業生は入学時の三分の一程度の数になりそうですが、いずれも、伝統ある三田高校定時制の卒業生として恥かしくない人間に育て上げる所存ですので、青葉会の皆様、心からご協力をお願いいたします。最後になりましたが皆様のご健康・ご発展を祈念して止みません。

生きる伝統

名誉副会長
教頭
内藤　伸

青葉会の名を耳にしたとき芦蕉の「あらたふと青葉若葉の日の光」を連想した。求道の旅の奥の細道の入口ともいえる日光で詠んだこの句からは、どんな強風にも負けない力強さと大空に伸びんとする発展性を感じて、何ともいえず好きである。

青葉会の総会に、一昨年、昨年と出さしていただいて、まさまさ青葉の名にふさわしい集いであることを実感している。このような立派な先輩達がおれば、安心して卒業生を送り込めると同時に、いい加減な生徒を育てる訳にはいかないという感を深くした。

本校定時制は、二十九名（内、定時制専任教員十四名）の教職員で、百五十五名（五月一日現在）の生徒の教育に当たっている。生徒の量・質とも時代を反映しているけれども、入学から月日を経るに従って学校生活に馴染み、三田高生らしい雰囲気を身につけてくるのは、当然ながら、不思議に思う。そこには、先輩達が築いてくれたよき伝統が生きているのだと感謝している。

九月末には学校祭が行われ、盛会の中に無事終了した。現在、高校の文化祭は、積み重ねによる研究発表が少なく、直前に計画されたり、その場限りの催しものが多いといわれる中で、本校の学校祭は、それらの批判を跳ね除けて余りあるものと自負している。

催しものの一つである生活体験発表会は、誰一人として私語する者もなく、友達の貴重な体験に感動して聴き入っていた。発表者は、自分の労苦をただ話すだけでなく、若者らしく明るい展望を将来に描いて、夢と希望を堂々と訴えていた。

芸術を中心とする美術・書道・写真等の展示も、学校の授業やクラブ活動の延長として発表され、出来ばえもすばらしく、教育的にみても満足できるものであった。

すべてのクラスが何らかの形で参加し、舞台発表や食堂経営に創意工夫をこらし、喜々として活動していたのも印象的で、本校の教育方針の一つである「協調親和の精神」の伝統が生きているように思われた。

学校祭を一例にして述べてきたが、いつも教師が生徒の中に見え隠れしながら指導している様に、まさに三田高校定時制の伝統のなせる業であろう。生徒の自主性を伸ばしつつ時には親にも、友にもなって指導している先生方の意欲と労苦に、校長ともども感謝している次第である。

今年も、働きながら学んだ人達にふさわしい勤労感謝の日に開かれる総会が近づきつつある。青葉会の皆さんとお会いできて、いい話を伺えることを今から楽しみにしている。（完）

昭和62年度『青葉会』の集い

会長　石田　弘

皆さんお元気でご活躍の事と思います。時は流れ、白かっの青春を精一杯ちこんだ母校を心の故里として訪れる日が近づいております。一つのコッペパンを分け会って勤労と学習の厳しさを乗り越えて来た仲間が待ってます。

皆さんに会えて「よかった」と激賛の印にと今回はタンゴと歌うヴァイオリンとして世界中で絶賛された「志賀清」先生をお迎えしています。是非さそい合ってご来会をお待ち致します。

昭和64年に母校も愈々創立六十年を迎えることになりますが、それへの記念行事その他同窓会としての準備も進めねばなりません。皆さんといろいろ智恵を出し合って成功させねばなりません。それ等の企画・進行の話し合いもできればと思います。

ではお会い出来る日を楽しみにしております。